

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**



Guided Search

new search

favorites

settings

cost

logout

help

Dynamic Search: JAPIO - Patent Abstracts of Japan

Records for: JP 1275511

save as alert...

save strategy only...

Output

Format: Full Record

Output as: Browser

display / send

Modify

select
all none

Records 1 of 1 In full Format

refine search

back to picklist

☐ 1. 11/19/1
02977911 EXTERNAL DRUG FOR SKIN

Pub. No.: 01-275511 [JP 1275511 A]

Published: November 06, 1989 (19891106)

Inventor: KONO YOSHIYUKI

SAKAMOTO TETSUO

SUETSUGU KEIKO

Applicant: SHISEIDO CO LTD [000195] (A Japanese Company or Corporation), JP (Japan)

Application No.: 63-103481 [JP 88103481]

Filed: April 26, 1988 (19880426)

INTL CLASS: International Class: 4] A61K-007/00

JAPIO Class: 14.4 (ORGANIC CHEMISTRY -- Medicine)

Journal: Section: C, Section No. 681, Vol. 14, No. 43, Pg. 53, January 26, 1990 (19900126)

ABSTRACT

PURPOSE: To obtain an external drug for skin, exhibiting excellent preventive and amelioration effect against any kind of chapped skin and having high safety and stability, by compounding uric acids or betaines as active component.

CONSTITUTION: The objective external drug for skin, useful as a facial cosmetic, foundation, etc., and effective not only in preventing and ameliorating chapped skin but also in increasing the turn-over rate of cuticle and preventing the aging of the skin can be produced by using one or more kinds of compounds selected from (A) uric acid or its derivative (a uric acid salt such as sodium urate, N-alkyl-modified uric acid such as 3-N-methyluric acid, 3-N-lauryluric acid or 9-N-butyluric acid, uric acid glycoside such as 3-N-ribosyluric acid, etc.) and (B) betaines (e.g. homaline, trigoneline, lysine betaine or taurobetaine) or their salts as essential components and compounding the components in an amount of 0.001-0.5wt.% each.

JAPIO (Dialog® File 347): (c) 2000 JPO & JAPIO. All rights reserved.

⑫ 公開特許公報(A) 平1-275511

⑤ Int. Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

④ 公開 平成1年(1989)11月6日

A 61 K 7/00

7306-4C

審査請求 未請求 請求項の数 2 (全8頁)

⑭ 発明の名称 皮膚外用剤

⑰ 特 願 昭63-103481

⑱ 出 願 昭63(1988)4月26日

⑲ 発 明 者 河 野 善 行 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 発 明 者 坂 本 哲 夫 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 発 明 者 末 継 慶 子 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 出 願 人 株 式 会 社 資 生 堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明 細 書

1. 発明の名称

皮膚外用剤

2. 特許請求の範囲

(1) 尿酸及びその誘導体からなる群より選ばれた一種または二種以上の化合物を含むことを特徴とする皮膚外用剤。

(2) ペタイン類及びそれらの塩からなる群より選ばれた一種または二種以上の化合物を含むことを特徴とする皮膚外用剤。

3. 発明の詳細な説明

[産業上の利用分野]

本発明は皮膚外用剤、特に肌あれの予防及び改善に用いられる皮膚外用剤に関する。

[従来の技術]

一般に皮膚外用剤には、化粧品、医薬品、医薬

部外品などがあり、特に肌あれの防止及び改善を目的とした皮膚外用剤については、従来より天然物から抽出した原料をはじめとし、種々の原材料を配合して使用されている。

すなわち、たとえば、ヘチマエキスやブラセンターエキスなどの抽出エキス、マルメロ等の天然高分子、コラーゲン等の蛋白質、キチン等の多糖類、アルギニン等の単体のアミノ酸、ビタミンE等の皮膚賦活剤あるいはグリセリン等の保湿剤などが肌あれの防止及び改善を目的として盛んに皮膚外用剤に用いられ、今日に至っている。

[発明が解決しようとする課題]

従来技術の問題点

しかしながら、これら従来の肌あれの防止及び改善に用いられてきた物質は、顔面皮膚の皮脂量や水分が少ないことに起因する肌あれの防止及び改善を対象にして使用されており、最近の論文

(Development of a Scientific Method for Classification of Facial Skin Types. Hiroko Kum

agai et al : VII Congreso Internacional de la I. F. S. C. C. vol.1~19,1984) で明らかにされている別種の肌あれ、つまり皮脂量が多く皮膚丘皮溝が不鮮明で落屑が見られるようなタイプの肌あれの防止及び改善にはまったく効果は認められず、したがって広範囲のタイプの皮膚の正常化に対して、十分な効果を期待することは出来ないという問題点を有していた。

発明の目的

本発明は前記従来技術の問題点に鑑みみなされたものであり、その目的はあらゆる肌あれの防止及び改善効果に優れ、更に安全性、安定性の面からも優れた皮膚外用剤を提供することにある。

前記目的を達成するために、本発明者らはあらゆる種類の肌あれの防止及び改善に対して効果を有し、更に安全性、安定性の面からも満足できる物質を得べく鋭意研究を重ねた結果、尿酸及びその誘導体、あるいはペタイン類及びそれらの塩からなる群から選ばれた一種または二種以上の化

合物を配合して得られる皮膚外用剤が、あらゆる種類の肌あれの防止及び改善に対して極めて有用であることを見出し、本発明を完成するに至った。

〔課題を解決するための手段〕

すなわち、請求項1記載の発明は、尿酸及びその誘導体からなる群より選ばれた一種または二種以上の化合物を含むことを特徴とする皮膚外用剤である。

また、請求項2記載の発明は、ペタイン類及びそれらの塩からなる群より選ばれた一種または二種以上の化合物を含むことを特徴とする皮膚外用剤である。

そして、本発明者らは、尿酸及びその誘導体、あるいはペタイン類及びそれらの塩を配合すると単に肌あれの防止及び改善のみならず、角質層のターンオーバー速度を速くすることも認め、本発明を発展させている。

すなわち、老化皮膚においては細胞代謝の低下により角質層のターンオーバー速度が遅くなるこ

とが観察されており、このことから、刺激をとまわずにターンオーバー速度を速くする物質は細胞代謝機能を再生し、ひいては老化皮膚を若返らせることができると考えられているので、本発明の皮膚外用剤は老化防止としても有用であることが示唆された。

以下、本発明の構成について詳述する。

尿酸及びその誘導体を含む皮膚外用剤

本発明に用いられる尿酸及びその誘導体としては、尿酸、尿酸ナトリウム、尿酸カリウム、尿酸アンモニウム等の尿酸またはその塩、3-N-メチル尿酸、3-N-ラウリル尿酸、7-N-ブチル尿酸、1-N-エチル尿酸、9-N-ラウリル尿酸、3,7-N-ジメチル尿酸などの尿酸N-アルキル変性物、3-N-リボシル尿酸、9-N-グリコシル尿酸などの尿酸配糖体などが挙げられる。

これらの尿酸及びその塩や尿酸配糖体は血清中にも見出されており、哺乳類の平均生存年齢と血

清中尿酸濃度との関連や、癌の発生率と血清尿酸値との関連より最近注目されている物質であるが、外用としての適用例は現在のところ見当らない。

かかる尿酸及びその誘導体の皮膚外用剤への配合量は外用剤全量に対してとくに限定されないが、通常配合量は、0.001~0.5重量%である。

0.001重量%未満では肌あれの防止及び改善効果ならびに皮膚角質層のターンオーバー速度を速くする効果が乏しくなる傾向があり、逆に0.5重量%をこえて配合しても効果の大きな増加は望めない。

ペタイン類およびそれらの塩を含む皮膚外用剤

本発明に用いられるペタイン類としては、リジンペタイン、オルニチンペタイン、ホマリン、トリゴネリン、アラニンペタイン、タウロペタイン、カルニチン、スクキドリン、グルタミン酸ペタイン、フェニルアラニンペタイン、γ-ブチロペタイン、ペタインなどが挙げられる。

これらのペタイン類またはその塩は海水中や魚

類、甲殻類に見出されているが、その生理学上の存在意義は必ずしも明らかになっておらず、外用剤としての適用例は現在のところ見当らない。

かかるペタイン類およびそれらの塩の皮膚外用剤への配合量は外用剤全量に対してとくに限定されないが、通常配合量は、0.001～5重量%程度である。

0.001重量%未満では肌あれの防止及び改善効果ならびに皮膚角質層のターンオーバー速度を速くする効果が乏しくなる傾向があり、逆に5重量%をこえて配合しても効果の大きな増加は望めない。

本発明の尿酸及びその誘導体、あるいはペタイン類およびそれらの塩は水に易溶で、油脂や有機性溶媒には不溶または溶けにくい物質であるが、懸濁状態でも皮膚外用剤への配合は可能であり効果に対して何の影響も与えない。

本発明の皮膚外用剤は、皮膚化粧料として用いることが好適であり、一般の皮膚化粧料に配合さ

れる通常の成分、たとえば油分、水、界面活性剤、保湿剤、低級アルコール、増粘剤、キレート剤、色素、防腐剤、香料などを必要に応じて適宜配合することができる。

なお、本発明にかかる皮膚外用剤は、皮膚に使用するものを広く指し、例えば、化粧水、乳液、クリーム、パックなどのフェーシャル化粧料やファンデーション等の皮膚化粧料に代表される。

また、尿酸及びその誘導体、ペタイン類及びそれらの塩を併せ配合することも可能である。

[実施例]

次に実施例により本発明を更に詳細に説明する。

なお、本発明はこれによって限定されるものではない。また、配合量は重量%で示している。

尿酸およびその誘導体の使用

まず、尿酸およびその誘導体を用いた本発明にかかる皮膚外用剤の比較試験を行なった。

比較試験に供したクリームの組成を第1表に示

す。

実施例1, 2, 3, 4

第 1 表

成 分		実 施 例				比較 例
		1	2	3	4	
A	ステアリルアルコール	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
	ステアリン酸	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
	ステアリン酸 コレステロール	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
	スクワラン	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
	2-オクチル ドデシルアルコール	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
	ポリオキシエチレン (25%付加)セチル アルコールエステル	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
	グリセリルモノ ステアリン酸 エステル	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
B	3-N-リボシル尿酸	0.05	0.02	0.01	0.001	—
	プロピレングリコール	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
	精製水	残 余				

なお、まず第1表に記載されているB相を加熱し、70℃に保った。これにA相を加え予備乳化後ホモミキサーで均一に乳化し、次いで徐冷してクリーム（実施例1～4、比較例）を調製した。

第1表の各クリームをパネル（22才～32才の女性）5名の顔の右半分に一日2回、連続2ヵ月間塗布した。

試験終了後に顔の左右両方の塗布部の肌を皮膚インピーダンスとレプリカ法により測定し、皮膚のしっとり感と皮膚のきめこまやかさを観察した。

皮膚インピーダンスは、増田などの考案した高周波による抵抗容量測定装置を用いた。これは3.5MHzの高周波電流発生装置と抵抗、容量の検出計を一括に含んだ本体部、それに1cmの長さのコード、その先端に付帯した円筒状電極ならなっている装置である。電極は同心円状で直径1mmの中心電極と1.5mmの距離にある内径4mmの外周電極よりなっていて、電極を皮膚に当てると高周波がそれを介して流れるが、数μAの単位のものでパネルは何の不快感も感じない。この電極を

被検出部に軽く触れると、1秒以内に一定値まで抵抗が急上昇する。

この抵抗の逆数はコンダクタンス (Conductance) と呼ばれ、単位は μ びであらわしている。このコンダクタンスは皮膚表面の水分量とほぼ比例関係にあり、更に皮膚は水分含量の多いほど皮膚のしっとり感が良いと判断されることから、コンダクタンスの増加で皮膚のしっとり感を数値的に評価することにした。

第2表は第2実施例にかかるクリームを使用したパネルの顔面での皮膚インピーダンスにおけるコンダクタンスを、比較例にかかるクリームの使用パネルの顔面使用部位と比較したものである。

3-N-リボシル尿酸を10⁻⁴重量%添加したクリームを使用したパネルの使用部位 (右顔面) のコンダクタンスは、上記比較例のクリームを使用したパネルの顔面での使用部位よりも有意に高い数値として得られることが理解させる。そして、このことは皮膚に対して、よりしっとり感を与えたクリームは第2実施例にかかるクリームである

ことを示している。

第2表

右顔面に使用した クリーム	実施例 2				
パネル番号	1	2	3	4	5
右顔面のコンダクタンス (μ び)	133	117	95	84	130
左顔面のコンダクタンス (μ び)	14	14	12	12	13

(以下余白)

同様にして全パネルのコンダクタンスを測定した。3-N-リボシル尿酸を添加したクリームを使用したパネルの右顔面のコンダクタンスと、比較例のクリームを使用した左顔面のコンダクタンスを比較し、

70%以上上昇した場合を著しく効果あり、

50%以上70%未満上昇した場合をやや効果あり、

50%以下の場合を効果なし、
と判定し、その結果を第3表に示す。

第3表

		実施例			
効 果	評 価	1	2	3	4
しっとり感	著しく効果あり やや効果あり 効果なし	5 0 0	4 1 0	3 1 1	3 1 1
きめの 細やかさ	効果あり 効果なし	4 1	4 1	4 1	2 3
角質層 ターンオーバー (日)		12	14	13	16

一方、皮膚のきめの細やかさはレプリカ法で観察した。シリコンラバーを皮膚に密着させて皮膚の表面像をとり、次いでこのシリコンラバーにエポキシ樹脂を流し込み反転像を得た。この反転像の表面に表面粗さ試験機を走査させて皮膚状態を調べた。そして皮膚表面の起伏の大きいほど、皮膚のきめが細やかであると判定した。

同様にして全パネルの顔面のレプリカ像をとり顔面の左右を比較し、明らかに右顔面の方が起伏が大きかった場合を効果ありと判定し、明白な差の認められなかった場合を効果なしと判定し、その結果を前記第3表にまとめている。

クリームに添加した3-N-リボシル尿酸は添加濃度にはほぼ比例して、皮膚のしっとり感、きめの細やかさの改善に対して優れた効果を発揮することが認められた。

また、角質層のターンオーバー測定はダンシルクロライド法で観察した。すなわち、ダンシルクロライドを白色ワセリン中に5重量%配合した軟膏をつくり前記パネルの前腕部の皮膚に24時間

閉塞貼布し、角質層にダンシルクロライドを浸透結合させる。その後同じ部位に1日2回以上（少なくとも朝夕）クリームを塗布し、毎日ダンシルクロライドの蛍光を測定し、その蛍光が消滅するまでの日数を皮膚角質層のターンオーバーとした。

測定結果は各パネルの日数の平均値で示した。

なお、通常の皮膚角質層のターンオーバーは、14～16日であるが、老化した皮膚においては18日前後にのびる。

第3表より明らかなように、実施例クリームを使用した場合には、老化した皮膚に比較し、ターンオーバーが短くなり、細胞代謝機能を活発化していることが理解される。

以下にその他の実施例を示す。いずれも前記同様の使用試験の結果、肌あれの防止及び改善に優れた効果を示し、しかもターンオーバーが短くなることが観察された。

実施例5

ミン0.2g、精製水76.2gを75℃で加熱溶解させた。両者を混合して乳化し、ホモジナイザーにより乳化粒子を整えて冷却し、W/O型の肌あれ改善効果のある乳液を得た。

実施例7

尿酸0.01g、ジプロピレングリコール5g、トリエタノールアミン0.5g、粉末着色料10g、香料0.1g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、少量の酸化防止剤及び精製水60.69gを混合し、均一に分散させて75℃に加熱した。この中へステアリン酸1.2g、セチルアルコール0.3g、流動パラフィン20g、ポリオキシエチレンオレイン酸エステル2gを混合溶解し75℃に保ったものを徐々に添加し反応乳化を行ない、冷却しながら攪拌して肌あれ防止効果のあるファンデーションを得た。

実施例8

95%エチルアルコール8gに1,3-ブチレ

95%エチルアルコール8gにポリビニルピロリドン0.05g、オレイルアルコール0.1g、ポリオキシエチレンモノオレエート1.2g、香料0.2g、パラオキシ安息香酸メチルエステル0.1g、少量の酸化防止剤、少量の色素を混合溶解した。これを尿酸ソーダ0.02g、グリセリン5gを精製水85.33gに溶解したものに攪拌添加して肌あれの改善効果のある化粧水を得た。

実施例6

セチルアルコール1.2g、スクワラン10g、ワセリン2g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、グリセリンモノステアレート1g、ポリオキシエチレン（20モル付加）モノステアレート1g、ポリオキシエチレン（20モル付加）モノオレエート1g、及び香料0.1gを70℃で加熱混合溶解し、同様に3-N-メチル尿酸0.1g、ジプロピレングリコール5g、ポリエチレングリコール1500 2g、トリエタノールア

ングリコール5g、ポリオキシエチレン（20モル付加）モノオレエート1.5g、7-N-ブチル尿酸0.05g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、香料0.1g、少量の色素を混合溶解し、ポリビニルアルコール10g、ポリエチレングリコール2000 1g、及び精製水74.15gを80℃で加熱溶解した中に攪拌添加し、室温まで冷却して肌あれ改善効果のある乾燥被膜型パックを得た。

実施例9

95%エチルアルコール5gにポリオキシエチレンソルビタンモノオレエート1.2g、アルギン酸ナトリウム0.1g、コンドロイチン硫酸ナトリウム0.2g、ヒアルロン酸0.1g、ビタミンEアセテート0.1g、グリチルリチン酸モノアンモニウム塩0.1g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.1g、3-N-ラウリル尿酸0.05g及び適量の色素を混合し、これをグリセリン5g及び精製水88.05gを混合溶解した中

へ攪拌添加して肌あれ改善効果のある美容液を得た。

ベタイン類及びそれらの塩の使用

次に、ベタイン類及びそれらの塩を用いた本発明にかかる皮膚外用剤の比較試験を行なった。

比較試験に供したクリーム組成を第4表に示す。

なお、クリームの製造法及び試験法については、尿素及びその誘導体を使用した場合に準ずる。

(以下余白)

実施例10, 11, 12, 13

第4表

成分	実施例				比較例
	10	11	12	13	
ステアリルアルコール	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
ステアリン酸	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
ステアリン酸 コレステロール	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
A スクワラン	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
2-オクチル ドデシルアルコール	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0
ポリオキシエチレン (25%付加)セチル アルコールエステル	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
グリセリルモノ ステアリン酸 エステル	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
ホマリン	1.0	0.5	0.05	0.001	—
B プロピレングリコール	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
精製水	残 余				

第5表は、第1.1実施例のクリームを使用したパネルの顔面での皮膚インピーダンスにおけるコンダクタンスを、比較例のクリームを使用パネルの顔面使用部位と比較したものである。

ホマリンを10⁻⁴重量%添加したクリームを使用したパネルの使用部位(右顔面)のコンダクタンスは上記比較例のクリームを使用したパネルの顔面での使用部位よりも有意に高い数値として得られることが理解される。そして、このことは皮膚に対して、よりしっとり感を与えたクリームは第1.1実施例にかかるクリームであることを示している。

第5表

右顔面に使用した クリーム	実施例 11				
	1	2	3	4	5
パネル番号	158	106	132	93	112
右顔面のコンダクタンス (μS)	16	15	11	10	13
左顔面のコンダクタンス (μS)					

同様にして全パネルのコンダクタンスを測定した。ホマリンを添加したクリームを使用したパネルの右顔面のコンダクタンスと、比較例のクリームを使用した左顔面のコンダクタンスを比較し、その結果を第6表に示した。

第6表

効果	評価	実施例			
		10	11	12	13
しっとり感	著しく効果あり やや効果あり 効果なし	4 1 0	4 1 0	3 1 1	3 1 1
きめの 細やかさ	効果あり 効果なし	5 0	3 2	4 1	2 3
角質層 ターンオーバー (日)		14	13	15	16

一方、皮膚のきめの細やかさは前記同様のレブリカ法で観察した。その結果を第6表にまとめている。

クリームに添加したホマリンは添加濃度にはば比例して、皮膚のしっとり感、きめの細やかさの改善に対して優れた効果を発揮することが認められた。

また、角質層のターンオーバー測定はダンシルクロライド法で観察した。

測定結果は各パネルの日数の平均値で示した。

第6表より明らかなように、実施例クリームを使用した場合には、老化した皮膚に比較し、ターンオーバーが短くなり、細胞代謝機能を活発化していることが理解される。

以下にその他の実施例を示す。いずれも前記同様の使用試験の結果、肌あれの防止及び改善に優れた効果を示し、しかもターンオーバーが短くなることが観察された。

コール1500 2g、トリエタノールアミン0.2g、精製水76.2gを75℃で加熱溶解させた。両者を混合して乳化し、ホモジナイザーにより乳化粒子を整えて冷却し、W/O型の肌あれ改善効果のある乳液を得た。

実施例16

リジンベタイン0.05g、ジプロピレングリコール5g、トリエタノールアミン0.5g、粉末着色料10g、香料0.1g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、少量の酸化防止剤及び精製水60.65gを混合し、均一に分散させて75℃に加熱した。この中へステアリン酸1.2g、セチルアルコール0.3g、流動パラフィン20g、ポリオキシエチレンオレイン酸エステル2gを混合溶解し75℃に保ったものを徐々に添加し反応乳化を行ない、冷却しながら攪拌して肌あれ防止効果のあるファンデーションを得た。

実施例17

実施例14

95%エチルアルコール8gにポリビニルピロリドン0.05g、オレイルアルコール0.1g、ポリオキシエチレンモノオレエート1.2g、香料0.2g、パラオキシ安息香酸メチルエステル0.1g、少量の酸化防止剤、少量の色素を混合溶解した。これをホマリン0.001g、グリセリン5gを精製水85.349gに溶解したものの中に攪拌添加して肌あれの改善効果のある化粧水を得た。

実施例15

セチルアルコール1.2g、スクワラン10g、ワセリン2g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、グリセリンモノステアレート1g、ポリオキシエチレン(20モル付加)モノステアレート1g、ポリオキシエチレン(20モル付加)モノオレエート1g、及び香料0.1gを70℃で加熱混合溶解し、同様にトリゴネリン0.1g、ジプロピレングリコール5g、ポリエチレングリ

95%エチルアルコール8gに1,3-ブチレングリコール5g、ポリオキシエチレン(20モル付加)モノオレエート1.5g、タウロベタイン0.2g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.2g、香料0.1g、少量の色素を混合溶解し、ポリビニルアルコール10g、ポリエチレングリコール2000 1g、及び精製水74.18gを80℃で加熱溶解した中に攪拌添加し、室温まで冷却して肌あれ改善効果のある乾燥被膜型パックを得た。

実施例18

95%エチルアルコール5gにポリオキシエチレンソルビタンモノオレエート1.2g、アルギン酸ナトリウム0.1g、コンドロイチン硫酸ナトリウム0.2g、ヒアルロン酸0.1g、ビタミンEアセテート0.1g、グリチルリチン酸モノアンモニウム塩0.1g、パラオキシ安息香酸エチルエステル0.1g、ホマリン0.05g及び適量の色素を混合し、これをグリセリン5g及び

精製水 88.05 g を混合溶解した中へ攪拌添加して肌あれ改善効果のある美容液を得た。

〔発明の効果〕

本発明は以上説明したように構成されているので、以下に記載されるような効果を奏する。

請求項 1 記載の皮膚外用剤によれば、尿酸及びその誘導体を含むこととしたので、あらゆる種類の肌あれの防止及び改善に極めて有効である。

請求項 2 記載の皮膚外用剤によれば、ペタイン類及びそれらの塩を含むこととしたので、あらゆる種類の肌あれの防止及び改善に対して極めて有効である。

特許出願人 株式会社 資生堂